

C. Goodwin の方法：マルチモーダルな相互行為と資源の共-操作 The methodology of C. Goodwin: Co-operations on semiotic resources

山本 敦[†], 牧野 遼作[†]
Atsushi Yamamoto, Ryosaku Makino

[†]早稲田大学
Waseda University
ayamamoto@aoni.waseda.jp

概要

本発表では、マルチモーダルな相互行為研究をその黎明期から牽引し続けた相互行為分析者 C. Goodwin の分析手法および概念の検討を行う。彼の提唱した諸分析概念は、人間の認知的・社会的な実践を構成する具体的行為の一般的かつ重要な相互行為的特徴を記述するものだが、独創的かつ難解なうえに数が多く、その妥当性や必要性に関して批判がなされることがある。本研究では、彼の分析手法をその基盤にある相互行為観から整理し、全体像の概略を呈示することを目指す。

キーワード：相互行為分析(interaction analysis), 共-操作(co-operation), 文脈的統合態(contextual configurations), 状況的活動システム(situated activity systems), 身体性認知(embodied cognition)

1. はじめに

Goodwin の分析手法は、人々のコミュニケーション・相互行為を録音や録画データをもとに詳細に分析し、その構成に用いられている構造を発見する学際的な研究領域(及びその方法の総称)である相互行為分析の一手法である。相互行為分析は、社会学の研究手法であり一分野でもある会話分析(以下CA)を主な方法論的基盤としつつ発展してきており、Goodwin の分析手法もCAと相互に影響を与え合いながら発展してきた。

そのような経緯から、彼の分析手法はしばしばCAの身体・物理環境への単なる拡張として扱われることがある。また、彼は多様かつ難解な分析概念を提案しており、(特にCAの理論的観点からは)その妥当性や必要性に関して疑問が呈されることがある(例えば¹⁾)。彼の手法や概念の有効性は、相互行為分析内での評価だけでなく、教育学や心理学、認知科学といった近接分野においても用いられることから伺える一方、相互行為分析の内部でも全体像が把握されないまま、上述のような批判やつまみ食いの利用が見られる。

本研究の目的は、Goodwin の分析手法を特にマルチモーダルな相互行為の分析に焦点を当て、彼の研究の集大成と言える”Co-Operative action”²⁾を中心にその基盤にある相互行為観から整理し、全体像の概略を呈示することである。これを通して今後の検討の足場を築

くことで相互行為研究の発展に資する。また、Goodwin の分析手法が身体性認知科学との間に深い親和性を持ち、相互行為の定性的分析と定量的分析の両りある接点となる可能性を指摘したい。なお、以下において示されるページ数は前掲書²⁾でのものである。

2. 目的的に構造化された環境と行為者：活動システムの進化論的選択

Goodwin は相互行為を、「行為者たちが共有し共在している環境における、行為の資源に対する共同的な操作からなる活動システム」として理解する。

1. 環境と行為者：ここでの環境は、行為者と無関係に存在する物理的実在としてのそれではない。ハイデガ一的な、目的と結びついた道具的存在に満ち、目的によって歴史文化的に構造化されている、行為者の観点から認識される環境である。行為者たちはこの中で、様々な道具的存在を資源として認識・利用し、目的的な活動を遂行することで、その経験と認知と共に自らの生活世界を社会化されたものとして形成する(p. 367)。
2. 資源に対する操作の行為者間での共有：活動の“やり方 practice”はいかようにでも選択できるわけではなく、目的の達成可能性と資源の利用可能性に制約される。また、人間の活動のほとんどは共同的になされるため、行為者間での行為の相互調整(相互行為)の成立可能性にも制約される。こういった環境と行為者双方の特性に由来する制約下で活動が繰り返し遂行されることで、活動のやり方には共に活動を行う“共同体”(≒個体群¹⁾)の単位で進化論的な選択圧が生じることとなる。安定して目的を達成可能なやり方がより選択されるようになり、不安定なやり方は選択されなくなることで²⁾、活動のやり方の共有状態が生じる³⁾(p. 4, 332, 431)。

¹ ここでいう「個体」は個々の人間としての行為者ではなく、活動の成員としての行為者であり、共同体は活動の単位でとらえられる。

² 先述の通り選択には達成可能性だけでなく、資源の有無やその利用・操作のコスト、相互調整過程のコストも関わると考えられる。

³ Goodwin 自身はこの選択の側面についてはごく軽く触れるのみで強調しておらず、むしろ個別の環境に適したバリエーション(および

3. **資源**：環境内に満ちている道具的存在は、目的的な活動の構成要素として利用されるときに資源と呼ばれる。道具的存在は、行為者によって常に資源として認識・利用可能なわけではなく、認識・利用には行為者が目的的な活動のやり方に熟練している必要がある。

4. **活動システム**：活動がその構成要素である資源と、それを認識・利用するための相互行為的で共同的なやり方を共有する熟練した行為者の操作によって、安定的に繰り返し産出可能な形でなされているならば、これを一つのシステムとみなせる。このシステムを特定の活動との関係においては**状況的活動システム *situated activity systems***(p. 366)、生活世界との関係としては**記号論的生態環境 *semiotic ecology***(p. 442)と呼ぶ。

このような相互行為理解を前提として、Goodwin は相互行為を、活動の遂行のために利用される資源の特定と、その操作およびそれによって構成される活動システムの構造の記述として分析する。

3. 活動を通じた経験と意味の生成過程：文脈-焦点事象と基質の共-操作

Goodwin が分析の焦点とするのは、活動内での事物や振る舞いの**理解可能性 *intelligibility*** の構成過程である。というのは、相互行為および活動システムは、行為者たち自身の活動に対する理解や、相互の振る舞いの意味の解釈を通して内的に組織されるシステムであるため、活動の共同的構成において相互の理解可能性の構成が不可避かつ中心的な課題となるためである。

活動中での振る舞いや出来事は、発話や身体動作(視線、身体の向き、姿勢、身振りなど)、道具や建物などの人工物や自然物など様々な事物の組み合わせとして生じている。行為者たちはそういった先行する振る舞いや出来事の意味を解釈し、その理解にあった振る舞いを続けて産出しあうことで、互いの理解を確認しあいながら共同的な活動そのものを構成していく⁴。この過程を行為者の観点から見たとき、資源の候補とな

個別の環境そのものが生み出される側面を強調する。しかし本稿では、行為者の再生産の観点からこの論点が必要であることと、彼の方法の射程を論じる目的からあえてこの選択の側面を強調している。なお、この選択の過程での集団規範による選択の役割を強調するとき、共有状態を社会的な共有と形容できるだろう。

⁴ 行為の連鎖を通じた解釈の確認は、相互行為を成り立たせる最も重要な構造の一つであり、相互行為分析において分析の妥当性を検討するための欠かせないツールでもある。この確認の基礎的な単位となっている「(社会的)行為」及び「行為連鎖」の概念も併せて、Goodwin の分析手法の根幹を成す重要概念であるが(p.40)、その用いられ方は会話分析でのそれと同様と思われるため、本稿では扱わない。

りうるものにあふれた環境の中で、今まさにこの時点において、何が焦点となる事象なのか、何が適切な解釈に必要な事物の組み合わせ、つまり文脈なのかを特定する、あるいは受け手が特定可能なように資源を組織する必要がある。この**文脈-焦点事象 *context-focal event*** 関係の共有が理解可能性の構成に関わる課題である⁵。特に身体動作の理解可能性の構成においては、何が文脈なのか、あるいはそもそもその動作は焦点事象なのかの判断に分析上の困難がしばしば生じる。

この困難が分析者にとっては大きなものであっても、日常生活を送る行為者としての我々にとって問題となることはさほど多くない。この理由を Goodwin は、相互行為における資源操作の最も基本的な構造から説明する。すなわち、先行する振る舞いが理解のための文脈としていたために既に共有済みの資源の組み合わせ(例えば先行発話や行為者同士の視線や身体の向き合い方、目の前のモニタなどの組み合わせ)の一部を維持し、一部を放棄あるいは再構成し、また新たな資源を組み合わせることで再利用して、新たな文脈-焦点事象関係を構成するように操作する、という構造である。

この操作は、行為者たちが互いの利用した資源をあたかも公共的なものであるかのように共有しあいながら、繰り返し再利用するようになされることから、**共-操作 *co-operation*** と呼ばれ、そのような行為産出の在り方を**共-操作的行為(協働的行為) *co-operative action*** と呼ぶ(p. 2)。また、共-操作の対象となり、新たな行為を生み出していく基体となっている資源群を**基質 *substrate*** と呼ぶ⁵(p. 38)。

基質とそれへの共-操作の構造、すなわち、直前の共有状態から共-操作的に更新されていく資源のまとまりが、どのような構造をもって配置されており、どのような操作によって更新されていくかを分析することが、活動内での理解可能性の相互行為的構成過程の分析、ひいては活動システムの分析となる。

4. 分析のための諸概念：文脈的統合態・記号論的資源・記号論的領野・積層化

文脈と焦点事象からなる資源の組み合わせ構造を分析するための分析概念が、文脈的統合態、記号論的領野および記号論的資源である。

⁵ なお、共-操作を通して基質が選択、**蓄積 *accumulation***(p. 31)、反復されていくという共-操作的行為の構造は、前述の進化論的選択の相互行為的な基盤となっている。

分析の基本の単位は、二つ以上の事物、出来事の時間・空間的並置によって生じる、要素の総和以上の意味である。例えば指差しは、特定の手形にした手を何らかの事物を含む空間との近接関係に持ち込むことによってはじめて指差しとして理解可能になる。このように並置関係を通して、注意を向けられるべき意味あるものの水準で解釈過程に持ち込まれる個々の要素を、**記号論的資源 *semiotic resources*** と呼ぶ(p. 238)。

上の指差しの例は、しかしながら指差しであることと、その対象が含まれる空間的範囲があること以上の理解可能性を持たない。指差しが十全な理解可能性を持つためにはそれ以外にも、指差しと意味を補い合う発話、指されている空間の構成要素とそれらが結びつく活動、行為者同士の姿勢や身体部位の向きや視線によって示される志向の組み合わせの構造、指差しが埋め込まれている進行中の活動という要素が多くの場合必要となる⁶。これらの要素も指差しの手形と同様に、それぞれ複数の記号論的資源の組み合わせから構成されて意味を持つ記号現象の水準であり、**記号論的領野 *semiotic fields*** という概念でとらえられる(p. 123, 173)。

活動を構成するに足るだけの理解可能性を持つ「指差し」行為は、これら複数の記号論的領野が、相互に意味を詳細化し、解釈の幅を制約しあうような形で⁶重ね合わせられることで成立する。この重ね合わせられた構造の全体を**文脈的統合態 *contextual configurations*** と呼ぶ(p. 123, 180)。これらの概念によって、行為の理解可能性の構成は単なる資源の寄せ集めとしてではなく、記号論的な構造として分析可能となる。

指差しの例での「行為者同士の姿勢や～示される志向の組み合わせの構造」という記号論的領野の存在からわかるように、記号論的領野および文脈的統合態の構成には単一の行為者だけでなく、活動に参加している複数の行為者が関わっている。そのため文脈的統合態は、活動のあらゆる時点において、一方の統制に収まらない形での共-操作的な再構成が生じる可能性を持った構造となっている。こういった行為・振る舞いの共同構成性・共同産出性を詳細に分析できるのが文脈的統合態概念の特徴である。

文脈的統合態の共-操作を通じた再構成の過程は、活動の相互行為的構成の過程そのものである。文脈的統合態の構造は活動の在り方と結びついている。例

えば、先の指差しがプレゼンの中でなされていたとする。スクリーンへと指を向ける手から成る記号論的領野に、図の細部を指示できるよう新たにレーザーポインターが加わるとしよう。何かを指しているという領野の意味自体は変化しないが、指の先にある空間内の対象から、光点が示す対象の範囲 (ex.線か面か)へと他の領野との関係で特定される事柄が変化し、結果として、手の動かし方から共起する発話の統語的構造、時間的共起の仕方までもが異なったものになるだろう。

このように、記号論的領野が意味を運ぶ媒体として持つ物理的な性質や時間的な持続性といった特性は、行為・意味・活動の構築においてそれぞれ異なる固有の寄与をする。この媒体依存性という特徴は、例えば、すぐに減衰する音としての発話が活動の細かい再構成を担うのに対して、変化しつつも消えずに持続し続ける身体の向きが活動の大まかな注意の対象を示し続けることができるように、媒体の持つ特性は活動の構成において本質的重要性を持つ。**積層化 *lamination*** は、このような、異なった性質を持った資源の重ね合わせ構造とその組み換え操作が活動の構成と強く結びつくという文脈的統合態の特徴を、層の積み重ねという視覚的イメージで呈示するための概念である(p. 123, 238)。

冒頭でも少し触れたが、「記号論的○○」という概念は、外的な枠組みを持ち込むものだということで、ボトムアップ的な志向を強く持つ相互行為分析者たちからの批判の対象となることがある。しかしながら、その導入の意図するところは、共-操作的行為の核心にある資源間の相互指標的な関係から生じる要素の総和以上の理解可能性を記述することであり、言葉とその意味のような規約的で一对一の関係だけではとらえられない現象⁷を体系的にとらえることを可能することにある(p. 36)。加えて、この記号論という切り口によって、言語、環境内の事物、意味解釈および認知の過程といった現象を統一的に扱うことを可能とすることで、現象間の分析上の区分を無効化し、一貫した用語で記述することを可能にしている⁸(p. 186)。

5. 社会化された身体性認知の獲得、発達と創発への相互行為的アプローチ

ここまで見てきたように、Goodwin の分析手法は、

⁶ Goodwin 自身は「解釈の幅の制約」のような表現はあまり（あるいはほぼ）用いないが、詳細化は他の可能性の排除を本質的に含むことと、システム論的な発想からはこの表現がより適切に思われる。

⁷ 言葉であっても、例えば発話の繰り返しは発話間に類像的(*iconic*)関係を作る。発話の隣接や共起関係、各種指示詞等もまた、発話の連鎖内外に記号的関係を作ることで、共-操作的な構造を生み出す。

⁸ 区分の無効化と一貫した用語での記述については注釈 10 も参照。

共同体における目的的な活動単位での進化論的選択を通した“安定的に同じ結果を生じる相互行為的活動システム”を説明の基盤とする。これを別の観点から見ると、相互行為は共同体の再生産の過程として理解される。この観点から見たとき、行為者が共同体において相互行為に参加できるようになることは、単に円滑にやり取りできるようになるだけではない。その共同体において環境内の何が活動の対象となり、それを何としてどのように認識し、操作し、他の行為者たちと共有し、活動を組織するのかという、活動とその中での認知の在り方に熟練することを意味する(p. 391)。

このように考えたとき、文脈的統合態の構成、つまり活動とその中でのなされる振る舞いや出来事の意味が媒体依存性をもつことの含意は、活動と相互行為の構成への本質的影響に留まらない。電子データの送受信のように媒体を問わず同内容の情報を伝えるのではなく、行為・意味・活動の構成において媒体の性質に基づいた固有の制約があるということは、すなわち、相互行為の意味的過程と物理的(身体的)過程が本質的に分離不可能であり、相互に制約しあう関係にあることを意味している。この認知の過程と物理的な過程の相互制約関係は、身体性認知の重要な特徴である。

このことは、相互行為の情報・意味のやり取りの側面が活動の物理・身体的側面に直接の影響を及ぼし、さらには行為者それぞれの環境に対する認知の側面まで連続した間身体的かつ間主観的な回路を持つことを示唆する。別の表現をすると、活動を共有する共同体内で環境に対する働きかけと意味の認知が相互行為を通して同型化する、認知の社会化の具体的な過程をとらえられる可能性を持つと考えられる⁹。

プロフェッショナルヴィジョン *professional vision* (p. 407)、知覚中枢 *sensorium* (p. 354) といった社会的な認知的世界の共有過程の記述を目指した諸概念は、上述のような相互行為の意味的過程と身体性認知の過程の不可分性と連続性を前提として成り立つものであると考えられる¹⁰。

最後に、“共同体”と進化論的選択を前提とすることの含意として、やり方の創発過程への視座と、定量的分析との接点を指摘しておきたい。まず、同じ目的(“生

態学的ニッチ”)内でも、同じ共同体(“種”)内でも、異なるやり方での“適応”の共存がありうることを指摘しておきたい。前者は言語共同体間でのやり方の違いの水準である(p. 55)。後者は、共同体内で同じ目的の達成のために異なるやり方が共存、あるいは相互依存的、寄生的に存在する可能性である。

それぞれの生物種内に、その再生産が可能な範囲での遺伝的バリエーションが存在することと同様に、ある共同体でのやり方内においても、活動の再生産を不可能にしない範囲でのバリエーションが存在できると考えられる。特に身体動作の使用については、発話と同等の普遍性と規範性を持ったやり方は存在しないだろう。そのようなやり方は、高い選択圧を持った共同体の中でのみ観察可能と思われる。

環境の選択圧が変化したとき、このバリエーションから新たな“種”(やり方)が創発しうる¹¹。以上の議論から、ニッチの記述とニッチ内部でのやり方のバリエーションの動態を、「生態学的」な観点から定量的に分析・モデル化できる可能性が示唆される。

謝辞

この研究は、科学研究費若手研究 (No. 22K13590, 研究代表者: 牧野遼作) の助成を受けたものである。

文献

- [1] Hazel, S., Mortensen, K., & Rasmussen, G. (2014). Introduction: A body of resources – CA studies of social conduct. *Journal of Pragmatics*, 65, 1-9.
- [2] Goodwin, C. (2019). *Co-operative action* (paperback edition). Cambridge University Press.
- [3] Goodwin, C., & Duranti, A. (1992). Rethinking context: an introduction. In Duranti, A., & Goodwin, C. (Eds.), *Rethinking context: Language as an interactive phenomenon*, pp. 1-42. Cambridge University Press.
- [4] Goodwin, C. (2003) Pointing as situated practice. In K. Kita (Ed.), *Pointing: Where language, culture, and cognition meet*, pp.217-241. Cambridge: Cambridge University Press.
- [5] 山本敦・古山宣洋 (2020) ピアノレッスンにおける演奏表現のマルチモーダルな協働的構築, *社会言語科学*, 23(1), 84-99.
- [6] 牧野遼作 (2021) 相互行為は楽し—遊戯としての相互行為分析の可能性, 木村大治・花村俊吉(編) *出会いと別れ「あいさつ」をめぐる相互行為論*, pp.79-105. ナカニシヤ出版.
- [7] 山本敦・牧野遼作 (2022) わからない相手との相互行為はいかに分析できるか: 身体知的重複障害者との“遊び”場面の相互行為分析, *新学術領域研究「顔・身体学の構築」第9回領域会議*.

⁹ 研究例として、演奏表現の指導を分析した著者らの研究⁶も参照。

¹⁰ このあり方について Goodwin は Hatchins や Vigotsky の研究などを引用するほか、パースの記号論の観点からの説明(例えば、個人的知覚内容としての *sin*sign が共同体内で共有された概念体系の *token* として相互行為を通して位置付けられることで *les*sign となる過程の分析(p. 356))も与えている。

¹¹ やり方の創発については、重度重複障害者との相互行為の成立を分析した著者らの研究も参照されたい^{6,7}。